

ひののとしょかんを 考える会通信

第 7 号



も く じ

としょかんと私	1
調布市立中央図書館見学記	1
予約サービス—協力貸出を中心に	3
障害者サービスの利用者として都立図書館問題を考える	5
「多摩むすび」からのPR	7
「稲城市図書館利用に関する市民アンケート調査」について	8
「図書館の会」参加報告	8
活動報告	9

清水 登志子（旭が丘在住）

私と日野の図書館の出会い、一人目の子どもの妊娠中、外出もままならない中で、近所にやってきた移動図書館ひまわり号が最初です（石嶋さんも乗っていましたね）。二週間に一度の巡回の待ち遠しかったこと！しかし、子どもが大きくなり、仕事も始まる中で、しだいに図書館から足は遠のいていきました。

再会は市政図書室。「日野市のごみの量は他市に比

べて多い？ ごみ処理にかかるお金は？」こんな疑問に答えてくれる他市の予算・決算や条例、基本計画や調査報告などが、たくさんそろえてあります。

今はインターネットでも、こうした情報の多くを引き出すことができます。新しくて、豊富で、住民運動の生情報もあって、夜遅くてもOKなど、かなり重宝ですが、困るのは求める情報を探し当てるのが大変

なこと。先日、マンション紛争で役立ちそうな情報がほしいとおもって検索をかけたら、数十に上るホームページがでてきて、絞り込むだけで数時間を費やしてしまいました。

こうした雑多に並んだ電子情報を整理して、提供してくれるレファレンスサービスが、図書館にほしいなと思っているのですが…。

調布市立中央図書館見学記

11月13日木曜日、午後1時半より、会員8名で調布市立中央図書館を見学してきました。

初めに座間館長から調布市立図書館の概要について説明をしていただいた後、現在抱えておられる課題についてお話しを伺いました。その中で、

- ・図書館は何をめざすのか。市民が求めているものは何か。提供の視点を考える。
- ・ベストセラーの複本の問題。図書館を利用していない人にどう理解してもらえるか。
- ・大人も満足のできるサービス。現役、リタイアを問わず、あらゆる人に。
- ・地域に関する情報収集と情報発信の拠点に。
- ・デジタル情報を扱う職員のスキルアップ、等々。

ひとつひとつが今の図書館を取り巻く問題そのものですが、座間館長のお話を伺っていると、そうした問題に対する専門職集団としての問題意識の強さを感じない訳にはいきませんでした。

長らく図書館から離れられ、昨年漸く図書館に戻られた座間館長ですが、委託問題で大揺れした当時管理職として大変頭を悩まされたという経験をお持ちで、図書館に対する本庁サイドの認識の厳しさを一番よく知る方でもあります。お話しの中でも、かつての委託問題を契機にひとりひとりの職員が大きな意識の変革を果たしたのではないかとの発言もありました。

事実、今大きな問題となっている都立図書館問題の集まりでも、調布の図書館職員の参加は他の自治体のそれとは比較になりません。自分たちを取り巻くさまざまな問題に前向きに取り組む姿勢の表れなのでしょう。

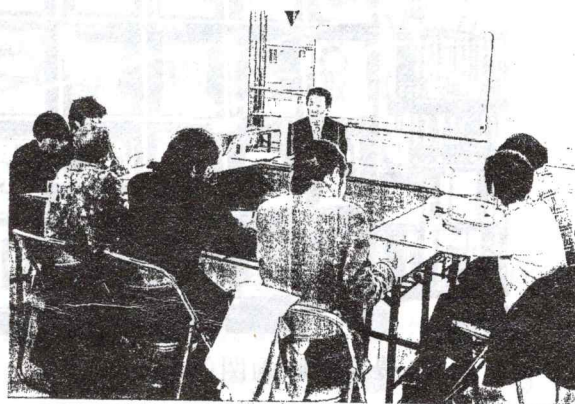
以下、座間館長のお話や館内を見学しての参加者からの感想を掲載します。



☆この会が発足してから、毎年各地の図書館見学を企画してきました。一年目の浦安市立図書館から始まり、埼玉県の小川町立図書館、町田市立中央図書館、そして今回は調布市立中央図書館の見学に行ってきました。それぞれの図書館はとても个性的で、見学に行くたびに新しい刺激を受けてきました。今回もまた学ぶことの多かった1日でした。

京王線で日野市から1本のレールを通じて繋がっている調布市。近くにあるのに、私は調布の駅に降りるのは初めてです。調布市立中央図書館は、調布グリーンホールの4・5・6階にあります。初めに座間館長さんから、調布市の概要や調布図書館としての取り組み、方向性など、とてもわかりやすいお話を伺いました。どこの図書館も厳しい状況のなかで、その地域性を生かしながら、市民にとってよりよい図書館としての在り方を進めようとしている姿勢がお話の端々に窺えました。

中央図書館は、スペースとしてはそんなに大きくはないけれど、それでも各階ごとに特色があり、ハンディキャップ・サービスのコーナーや、社会人自習室、図書検索のやり方など日野との違いが見られ、とても興味深く見学できました。特に映画に関



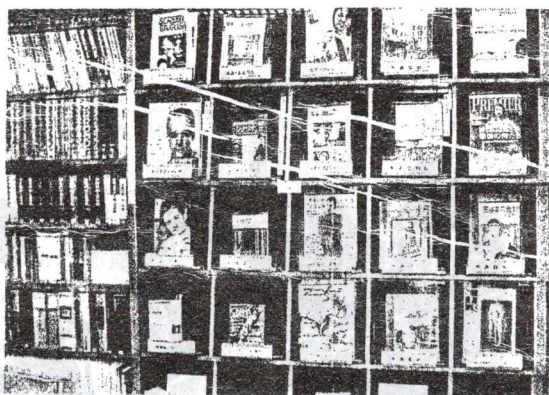
<座間館長のお話をうかがう>

する資料の収集保存には目を見張るものがありました。私は調布市民ではないから借りることはできませんが、図書館の中で読むことはできます。ぜひ今度は1日かけて、これらの資料に会いに来ようと思いながら帰路につきました。(久保田)

☆調布市や市議会に関する資料、とびだす絵本や紙芝居も多数あり、また漫画の本も貸し出すとのことに少々驚きました。場所も市の中心にあり交通の便も良く、幅広い市民に利用されている様子が窺えます。

(加藤)

☆私は図書館というものは、本を貸す、借りる、自習室に於いて資料で勉強する所と思っていました。ところが調布市では、赤ちゃんの検診時「ブック・スタート・パック」と呼ばれる絵本や親に対するガイド・ブックをセットしたものを配布し、赤ちゃんの時から「保護者と時間と本を共有」する。つまり赤ちゃんから、図書館に親しんで貰います。6階には授乳室があり、保育室も設けられています。「ハンディキャップ・サービス」もありました。点字本、点字絵本、布の絵本、大活字本、対面朗読室、録音室があり、そのための辞書が多数置かれ、ボランティア、職員の方がいらっしやいました。



<豊富な映画関係の雑誌>

自習室も、社会人自習室が別に設けられ、現役、リタイアした方が利用されています。赤ちゃんから大人まで図書館利用が行われています。また、地域に関する資料として、かつて撮影所があったので、映画のポスター、台本、パンフレット、原作を集めているとのこと。又、この町が時代に先行するにはと図書館員が勉強をするということです。図書館の果たす役割が限りなく広がっていくように思い、参加した私自身、頭を叩かれたような思いで帰途につきました。

付記：調布グリーンホール4・5・6階からながめる多摩川も素晴らしいですが、日野の中央図書館の緑に囲まれている建物も、私には落ち着きと優しさを与えて貰っ

ています。(山縣)

☆駅前大きなビル内にある図書館。ホールに入りまず“一日楽しめる図書館”という第一印象。建物の中の3階分のフロアを占めており、各フロアには利用者の数が多く、私の考えている図書館というイメージからちょっと違った開放感のある感じを受けた。地域資料の多さとそれを大事にし、周りが現代的になっている反面、歴史を守っている様子が窺えた。他にもいろいろ。地域のための図書館という暖かさがある印象も強かった。(小池)

☆調布中央図書館は、調布駅近くの大きな文化会館ビル内にあり、講座室・展示室・喫茶室・レストラン（最上階にあり眺めが良い）も併設されていて、丸一日かけてゆったり楽しめそうな施設です。地域性を重視し、地域の資料のほか、市在住の水木しげる氏の資料（図書館便りの表紙は水木氏の絵）や、日活撮影所から寄贈された映画の貴重なポスターや映画資料などがたくさんあります。欲を言えば、もう一回り大きいと、ゆとりをもって閲覧ができると思います。職員の方たちが勉強熱心なことや、館長さんのお話（これからの図書館ははっきりした特徴をもつことが大切）もたいへん印象に残りました。(山田)

◆ シリーズとしゃかんをもっとよくしろう No.4 ◆

予約サービスー協力貸出を中心に

石 嶋

図書館では、利用者の皆さんから求められた資料を所蔵していないとき、まず購入か借用かを考えます。できるだけ購入したいところですが、年々削減される図書費の中では、どうしても購入を見送らざるをえなかったり、購入しようにも資料自体が運悪

く品切れとか絶版等で入手不可能となることもあり、そのような場合に、図書館間の協力貸出の制度を利用して、他館からその資料を借用した上で提供している訳です。皆さんがお借りになる時、特殊なビニールカバーがかけられた資料があったら、それ

は都立図書館や他の自治体から借用した資料なのです。

その借用先は、2002年度で、借用資料総数5,911冊の内、約72%が都立図書館、26%が市区町村立図書館、残り2%が国立国会図書館や都外の公立図書館等でした。特に、都立図書館からは毎週協力車が巡回してくれ、市区町村立図書館からの借用資料とともに無料で確実に借用できるのが特長です。一方、国立国会図書館（片道分負担）や都外の公立図書館（往復負担）の場合は郵送料がかかるのが難点と言えます。

さて、最近では、ホームページ上に所蔵データを公開する図書館が増え、こうした情報をもとに、ますます図書館間の資料のやり取りが拡大しているところですが、こうした中で、世の流れに逆行化していると思えないのが、都立図書館の協力貸出事業の縮小化です。

2002年4月の都立図書館再編を前に、重複資料の大量処分など利用者無視の政策を断行し、今年度も以下のような協力貸出事業の新たな変更を一方的に通知してきました。

①新刊書は約3ヶ月間は協力貸出をしない

②昭和25年以前の資料は協力貸出しない

③10万円以上の資料は協力貸出しない

④辞書・年鑑等の参考図書は複本がなければ協力貸出をしない

⑤シリーズものは一度に5点まで

⑥山本有三文庫の資料は協力貸出をしない

また、開館当初から都立多摩図書館が培ってきた雑誌の協力貸出についても、都立中央と重複しているものを処分し、実質的な協力貸出制限を始めました。

ホームページ上に所蔵情報を公開し漸く資料へのアクセスが容易になったと思った矢先、上記のように貸出制限対象が拡大され、利用したければ都立中央図書館（港区）あるいは都立多摩図書館まで直接来館しなさい！という訳です。多摩地域という地理的なハンディ（*交通費という経済的な負担も強いられもします）を考えているとはどうしても思えません。全くの来館者優先であり多摩地域の都民にとってはサービス後退の何ものでもありません。

東京都には広域行政を任された責務、即ち、第一線図書館である市区町村立図書館をバックアップするという責務があると思います。しかし、今日の都立図書館はそれを放棄しようとしているとしか考えられません。ゆくゆくは都立多摩図書館がなくなるのではとの不安もよぎります。

こうした都の姿勢に対して、利用者である都民ひとりひとりが直接声を上げない限り何も変わらないでしょう。地元自治体の理事者へ・議会へ・都立図書館へ・都知事へ・都議会へ、さまざまな方法で私たちの声を伝えましょう！

障害者サービスの利用者として

都立図書館問題を考える

中山 玲子

このたび、「日野の図書館を考える会」の皆さんから、「都立図書館における障害者サービス利用の問題について書いてほしい」という依頼を受けました。その際、私自身が日野市立図書館の職員でもあることから「仕事上の立場もあると思うから匿名での原稿でかまわない」という配慮の言葉をいただきました。

しかし、私はあえてこの原稿を実名で書くことにしました。その理由は、先ず「自分を偽りたくなかったこと」、そして、「職員対利用者という関係で動いている日野の図書館を考える会の中で私はそういう立場の違いによる枠を取り払って活動したい、つまり、図書館員も個人の立場になれば一人の市民であることを強調したかったから」です。

私にもたまには「職員」という殻を脱がせてください。いつも少数派としてその願いの声を社会に消されてしまう障害者の一人として、障害を持つ仲間の声をありのまま皆さんに伝える立場にならなければ、と強く思うから。

私は、都内在住の視覚障害者です。活字を読むことは困難であり、あらゆる情報は点字または音声から入手します。

例えば、健常者の方ならば、図書館や書店に行っても自由に棚から本を選びその場で読むなんていうことは当たり前のことと思いますが、私たち視覚障害者にとってはそのように自由に読書することは夢のまた夢であり、図書館やボランティアグループが行っている音訳・点訳サービス（弱視の

人なら拡大写本サービスも利用できる場合もあります）に頼らざるをえません。

ところが、私の住んでいる街（日野市ではありません）の図書館では録音サービス（本など読みたいものをカセットテープやCDに録音すること）は行っていないようです。点訳サービスは、担当職員の方の大きな理解も得られてようやくスタートするようですが、まだ起動にのっていないので自由に頼めるという雰囲気にはなっていません。対面朗読サービス（読みたい本などをその場で読んでもらえるサービス。ただし多くの場合予約制）は盛んに行っていますが、フルタイムで働いていて個人的な活動も忙しい私にとってはなかなか利用する時間がとれません。そんなわけで、地域の図書館に読みたい本があっても点訳や録音の依頼がしにくく、結局読むことをあきらめてしまうことが多いです。

個人的に持っている本は都内の点字図書館やボランティアグループに点訳や録音の依頼をすることがあります。でも、どこも人材不



足で忙しいんです。それに、点字図書館の中には、都内の多くの公共図書館同様点訳者や音訳者に謝礼を払っているところもあり、そんなところでは「予算がないけどなんとか引き受けましょう」と言われます。そんなことを言われるとこちらも負担で「そこまで手間をかけるなら読みたいものを我慢しよう」と思ってしまうんです。

さて、前置きが長くなってしまいましたが、今回は、最近の都立図書館の問題を受けて、私が今抱えている都立図書館利用の問題と、今後の不安について書きたいと思います。地元の図書館などでの録音や点訳のサービスが前述のような私にとっては、本当は最も頼りたい図書館が都立図書館なのですが…。

これから少しきびしいことを書きますが、それは皆さんに私のような視覚障害者がおかれている図書館に対する切実な問題を知っていただきたいからです。しかし、おさえておかなければならない大切なことをひとつ。それは、こんなに問題のある都立図書館にも熱意のある職員の方がおられるということです。そして、そういう熱意のある都立図書館の職員の方が、理想と現実のギャップに今一番苦



しい立場におかれているのではないかと私は考えます。そんな職員の方が言えないことも、利用者である私だったら言えるのではないかと、思い切って書きます。どうか、この私の文章を読んだからといって、都立図書館の職員の方への安易な批判はしないでください。

私は都立中央図書館と都立多摩図書館の両方に利用者登録をし、それぞれの視覚障害者サービスを利用しています。こう書くと「便利に利用している」と思われるかもしれませんが、今まで経験した問題を書きます。

今から3年前、都立図書館のホームページから読みたい本を1冊見つけました。都立中央図書館所蔵でしたので、都立中央図書館に点訳の依頼をしました。外国語も入ってくる本でしたので、点字で読むことに向いている本だったからです。

ところが、「点訳の予算がない」と断られてしまい、やむを得ずテープ録音してもらうことにしました。ところが、いくら待ってもその本の録音が完成したという連絡はなく、1年半たったころに待ちきれず、「例の本どうなってますか？」と聞いたところ、「まだ作成中です」とのこと。困った私は職員に無理にお願いして、録音しただけの（校正もされていない）その本を、できたところから貸してもらうことにしました。でも、なにしろ校正前ですから、間違った読みもあるようで、そのテープを聞いていても信頼できるものではありませんでした。そんなことをしているうちに録音依頼からもう3年です。もちろんまだ完成していません。というか、私の手元には完成したものがまだ届いていません。「予算がなく、なかなか録音が進まない」との職員の方のお返事でしたが、今でさえこんな

状況です。都立図書館の予算がこれからさらに削減されると聞いていますので、もう都立の図書館にある価値の高い専門書の点訳や録音はしていただけないかという不安です。皆さんなら、読みたい本を3年も読めずにいるなんてこと考えられますか？

それから、都立図書館の職員もどんどん削減されています。点訳や録音サービスを担当する視覚障害者サービスの職員も例外ではありません。今でも、都立図書館から借りる点訳図書や録音図書の質にはときどき「あれっ」と首を傾げてしまうものがあります。こんな状況で、職員がさらに減って、質の良い図書製作が今よりもしくなると思うとこれも不安なことでは

す。

また、都立図書館は、規模が大きいので、非常に分業化されていて、「視覚障害者のことは、視覚障害者サービス係に任せれば良い」といった風潮があるようで、視覚障害者サービス担当以外の職員の、障害者に対するコミュニケーション力の低さを電話対応や直接の関わりの中で感じることも多く、かなしい気持ちになることがあります。

今、この都立図書館の問題について多くの皆さんが熱心に活動されていますが、私からすると、「それでも皆さんは私たち視覚障害者よりもずっと自由に都立図書館を利用できるではないか」といううらやまさが湧いてきてしまいます。どうして、障害のある

人とならない人との読書環境には未だにこんな不公平があるのでしょうか。

この原稿を書くにあたり、与えられた文字数をずいぶん超えてしまいました。それだけ、私たち障害を持つ者は、普段図書館に対して我慢して黙っていることが多いことをご理解いただきたいと思います。

最後になりますが、今回は日野市立図書館の職員である私が都立図書館の障害者サービスについてできるだけ率直に書きました。今後、こんな私のように率直に、日野市立図書館の障害者サービスについて飾らない意見をくださる利用者の方がどんどん増えることを期待しています。なぜなら、図書館は「市民が育てる」ものなのですから。

「多摩むすび」からのPR

昨年10月に発足しました「多摩地域の図書館をむすび育てる会」（通称「多摩むすび」）のプロジェクトチームから、多摩地域における「資料の保存」の問題について、9月4日、本報告『東京にデポジット・ライブラリーを作ろう！－多摩発・共同保存図書館基本構想－』が出ました。

デポジット・ライブラリー（利用のための保存図書館）の設立に向けた提言ですが、今後の取り組みとして、都立再編反対運動時に、署名活動や市議会への働きかけなどをしてくれた多摩各地の方に改めて話しを進め、また、話しを聞いてくれた都議、市議の方などに、東京都と運動に関わってきた私たちのその後の経過を

語り、デポジット・ライブラリー建設の協力要請をしていきたいと考えています。

皆さまのご参加ご支援をお待ちしております。

なお、本プロジェクト報告は、

<http://www.hinocatv.ne.jp/~jelhyg/kankeidantai/tamamusubi/tamamusubi.htm> 三多摩図書館研究所ホームページの関

連団体コーナー「多摩むす
び」上に掲載されています。
追記：この12月に『東京に
デポジット・ライブ

ラリーを 多摩発、共同
保存図書館基本構想』が
ポット出版から刊行されま
した。巻末に関連文献や統

計等が掲載されています。
是非ご覧下さい。

「稲城市図書館利用に関する

市民アンケート調査」について

稲城市教育委員会生涯学習課が、「社会教育だより ひろば」というA4判1枚の広報誌を出している。私が手にしたのは2002年12月10日発行で第350号。中央図書館建設に向けての市民の意向を反映させるためのアンケート調査の結果をまとめたもの。稲城中央図書館建設については、地元でのさまざまな事態が噂で流れているが、それは別として日野市でも図書館についての市民の考え方を知りたいと思った。「社会教育だより ひろば」のアンケート結果のまとめは次の通り。

アンケート回答数（男女別、年代別）、利用の仕方、目的、ほしいスペース、利用したい時間などに分けて数値を出している。また、一番利用したい本、利用したい資料、雑誌、CD、デジタル資料など希望があり、最後に「こうしてほしい」という自由回答。

すでに中央館のある地域でも、図書館を利用している市民の利用傾向や希望、利用しない市民の理由などを知る手がかりを得られるのではないだろうか。都立多摩図書館の問題は、実際にはとても大きな意味を持っているが、図書館利用の一般市民にとってはなかなか理解しにくい面もある。だが自分が利用している身近な図書館が無くなるとしたどうするだろうか。（久保田記）

「図書館の会」参加報告



☆日時：2003年6月12日
午後1時30分～5時

場所：ルネ小平 参加者：久保田正子

この会は2ヶ月に1回、多摩の各市で図書館に関わっている市民が集まって、自分たちの地域からの報告とともに、「市民にとって図書館とは？」、「学校図書館と公共図書館のありかたは？」、草の根の「親子文庫」の活動などを通して、市民としての視点から図書館を見つめ続けてきた。

各自治体の財政難を口実にした、資料費の削減による図書館サービスの低下、カウンターでの貸し出しを民間に委託するとい

う安易な動きなど、図書館を取り巻く厳しさは深まっており、地域の違いはあれどもその一点についての不安は同じだった。

アドバイザーとして毎回参加して下さる山口源治郎先生が、「図書館司書の資格の問題や図書館の組織としての在り方」などを基本から考えてみようという提案された。目の前のことに振り回され、基本的なことが理解できなくては先に進む道筋も掴めない。

山口先生のまとめられたレジメをもとに、熱心に討議し、考えた。時間は決まりの4時30分を過ぎ、会場を閉める5時ぎ

りぎりまで続き、また次回の9月11日に
継続することになった。

9月11日 残念ながら体調を崩し、欠席
しました。(文責 久保田記)

日野の図書館を考える会活動報告

2003年

6月12日(木) 図書館の
会 ルネ小平 久保田参加
6月20日(金) 学習会
女性センター 7名参加
・『今、学校図書館を考え

る』

7月11日(金) 定例会
女性センター 4名参加
・通信7号について
・見学会について
・その他

9月13日(木) 調布市
立中央図書館見学会 8名
参加
12月22日 生活・保健
センター
・通信印刷・発送作業



※ この通信は点訳版もあります。ご希望
の方は事務局までお申し出下さい。

※三多摩図書館研究所ホームページ

(<http://www.hinocatv.ne.jp/~jelhyg/>) の
関係団体情報コーナーに、「日野の図
書館を考える会」のページが掲載され
ています。

ひののとしょかんを考える会通信 No.7

2003年12月22日発行

発行者 日野の図書館を考える会

〒191-0062 日野市多摩平4-7

多摩平の森 1-7-802

久保田 正子 Tel. 042-583-0960